



Handwritten Chinese characters on a vertical red label, likely the title or author's name.

Faded rectangular label on the cover, possibly containing a library or collection number.

Library sticker with the following text:
^ 13
2905
6



時子拘ときこずららひひででたたるる先さきのの両りやう個こがが縁えんのの神かみ虎こで
ささももままででもも結むすぶぶ神かみののおおんん計けいららひひままあありりああららずず非ひ
心こころ算ざんのの眼めがが先さき法ほふとと五ご明めいをを福ふくとと頑がんのの心こころははららん
釋しやくふふ巧くわうとと新しん婦ふをを注しゆぎぎ條じやういいとと高たか僧そうももああるる
宿しゆく後ごありり始はじめ免めんよりりととままのの中ちゆうにに於おつつててああららずずああららずず
貴きのの樂らくとと繁はん華かにに誇こほるる時ときああつつてて悲かなしし味あじ
はは此こゝのの浮う沈しんとと其そののの理りをを知しりりせんんとと示しすすとと示しすすとと示しすす

愁しゆう歎たん人にん情じやう作さくせせのの骨こつをを折おりりああららずず看み友とも
ままのの心こころをを入いれれてて復また相あひかかへへぬぬとと言いふふとと言いふふ
ととままのの心こころをを伏ふししてて白しろまますす
此こゝのの心こころをを入いれれてて復また相あひかかへへぬぬとと言いふふ
初はつ免めんとと言いふふ
拙せつ著しやく者しやく堂たうのの先さき家け徳とく

行路難
 非山非水
 只在人情
 反覆間
 白居易
 けり
 唐の
 おも
 けり
 けり
 けり
 六帖
 後人あそむ



陶綾の
 衛兵覚の
 泰四郎
 於耶松



比方孫五
 大多屋
 於
 橋



愁心一信
 長新巻
 夜思千重
 忘意道

李端

大多屋の
 躬泰四郎

以方
 藤



堀川百首
 忠房
 之
 物
 人
 耶輸
 於
 再出

萬と云ふ由ありしは白田自方の所なり。白田はうを多作は。
其の事なり。此の由ありしは今一説は月小なり。やういふに
まん十の年齢と十なり。申勸の女也。隅紙ありて
出来し。一とあり。お花さぬ。手お勝ふを並べし。其
ありある引籠りし。おあし對して。殊小也。を控りし。
哉。お小の私。お花さぬ。手お勝ふを並べし。其
田用自義。お花さぬ。手お勝ふを並べし。其
深し。お花さぬ。手お勝ふを並べし。其

お交會のりし。お花さぬ。手お勝ふを並べし。其
りの。此方なり。モウ。只今。お花さぬ。手お勝ふを並べし。其
て。田破。お花さぬ。手お勝ふを並べし。其
お影。一。お花さぬ。手お勝ふを並べし。其
お花さぬ。手お勝ふを並べし。其
お花さぬ。手お勝ふを並べし。其
お花さぬ。手お勝ふを並べし。其
お花さぬ。手お勝ふを並べし。其
お花さぬ。手お勝ふを並べし。其

薄きく坊のふつとて一日のぶさいませらぐまら
マアそいところ。日柄を擇んでよく小田祝言の務り
一箇小田承知おまのて下さすた態くらあつと甲斐の
あつ有難うござんてまつら小遠くは鏡小女の魂さま
あつ程のあらせむふ家の主人松竹屋勝おまのま
ゆて封函あり「サア兵今承さすて承知拜らめ陶徳の
見え来さんのお孫とす。どきとく一向知らぬ。見え来
さん親の代々敷物の取引してある貴向ふ年来

世惡意あるやと結女見世が兩個の個あつと答ふま
ぢやうこの女見世が天妻あつ縁対あまのてその子が養は
節どあつ能王「ハイ左格でござんてはただ日外く見え
あまさあゆ松竹屋のま自己中はあまさんご知りぬ申
ぢやアあつと伴人ごぼるまうと左格の人はあつと格の
と逆で前の田邊忠ごさうくと先初田物米のあつと小
あすのて下さすまうナ「そのあつはさしはあつと格
を成さすまの男ごあつとあつとをあつ親のあつ何れい

て申かゝりしと被まを不極ことガ初短く小あるといふ
何れ自由不致うあゝ愛ひあゝ婿さゝく乳小のぬこ
何ぞぞあゝらゝ急まゝに抱ひて死なむらゝ不詮捨終が
あゝらゝ今月破綻不まゝ也ア。同くあゝらゝ女鬼の跡
あゝらゝきて海むるゝと尻不破綻と交ふゝらゝ金伴
まア何指ひ入るゝては格不延とてあゝらゝあゝらゝ左格
あゝらゝるゝと日格へあゝらゝあゝらゝ何ぞあゝらゝ乳不かるゝト官結
らゝらゝてあゝらゝ婿の格あゝらゝて天意を格まゝの扱扱不問

あゝらゝ惣生中かゝらゝあゝらゝあゝらゝと仕出せらゝ結うが面倒去
ア也持まへの口體たゝらゝい涅めゝ不結とあゝらゝとあゝらゝ
あゝらゝ一史がやあゝらゝ格かあゝらゝあゝらゝあゝらゝあゝらゝ格のあゝらゝ格
あゝらゝあゝらゝの乳を。些些と小あゝらゝあゝらゝと。殊物由ある
とあゝらゝあゝらゝ支託人うゝと也。中も若くもあゝらゝあゝらゝあゝらゝ
殊不坊由あゝらゝと。些由かゝらゝ乳不かるゝらゝ也。鉄あゝらゝぢぢアと
あゝらゝせん。勿偏か婿さゝらゝあゝらゝあゝらゝして。お婿の抱えん
この心懸きを甲一巻の口體あゝらゝあゝらゝ婿さゝらゝあゝらゝ



大多屋
泰四郎
婿の図

招まねのま在まのまあまぐま、ま中ちゆう、ま情じゆううまこまいますまうま此こ方まのまおま禮れい
さま不ふ育いくアまひま今いま回まわ此こ方まへまおま使つかひま不ふ系けいるまとまおま笑わらふま
まままましてまコこウウくま、ま華け勝しやう何なに卒そつしてま早はやくま引ひきまかまうま不ふ影かげ
ままうまてま其そのままはま被ひ撥はつま外あままくまハまモモウウ一いち生せい女にょ房ぼうハは持も後ご
ととままままくま、まままのまあまままでま私わがのま山やまおまたまくまままのまおままま
せんせんぞぞハハモモウウ、まこのま後ごぢぢぢぢアアアアアアアアアアアアおお佑たすめめああららううおお坐ざ敷しきをを
評ひやう備びままのま人ひと一いち生せい後ご命めい万まんるるままううくくはは推おし察さつをを河が
卒そつおお礼れいががひひ中ちゆうまま下げまま西せい目め小せう成じやううう笑わらうううう殊こと不ふ

辯べん舌ぜつ交かうふふ、まいいままららままとと、ま情じゆうをを束たすつつ、ま妻さい時じ跋はく然ぜんとととと
けるけるがが、まいいろろききなな後ごくく、まままてていいろろままがが、ま彼か見み童どうままいいのの中ちゆう
聴ちやう書しよササトトいいひひのの後ごのの方かたをを向むかひひ。ま渾こん家かのの後ご久きうをを例れいへへ
呼こゝろびび一いち大だいくくのの後ごでで、まままてていいろろままがが、まのの卒そつ勝しやうさんさんととままううがが。
彼か通とううう不ふいいひひああささるる。勿な備び虚きよ言げん由よしああるるままいいろろ。接せつ
をを房ぼうへへてておお禮れいせせううううトトいいををままてて接せつ久きう由よし女にょ児にのの
おお耶や輓わんがが、まかかううくく、ま病びやうひひ由よしままままがが、ま推おし察さつ由よし被ひ撥はつつふふ
ままののままううらら。尾お不ふままううららとと女にょ児にのの一いち途と、ま接せつああててママハハ

米田家。また松竹屋の方よりして。扱多の禮を
賜るふより。尊勝も使ふ者ありし。規模ありと大に
喜び。七八日とてこのことを些由を申す。先主未さぬ
小か影し。まうし。悦ませ。来るせん。と眼を告
く。陶後の御んど降りける

作者のそく。その後婚禮の一條ハ町人あつ
大家のふゆあ。その結構言結不絶し。まじ里
寢きののり装束など。於て物活ありといふと。澤長

うて着友の。飽りんを。おきて。紀さん。あつ
の景勢を。よく。すまふ。を。あつ

第三十二回

千夜か。情いん。ぐ。目出。う。といひ。親教。縁者。戒ひ
ハ出入の甲じより。後者の品ハ。あん。を。り。納戸。後
と。扱果。ね。壽々。申。お。さ。一。入。さ。う。て。扱。ま。教。の。さ。
婚禮の。夜。置。寢。さ。ふ。の。同。席。ハ。出。あり。の。う。松竹
屋の。ま。入。婿。小。對。し。扱。ぶ。う。を。い。ひ。せ。ま。い。と。扱。る

奉勅を。文の書つゆる。つぎ。志不真不まのへとの。かろ
 目出さき。おり。あま。右不左のえん。日不吉あり。胸
 不納め。云。葉不吐。さ。ん。葉。日。幸。日。怜。割。け。ま。い。縁
 ぐ。ま。の。ひ。合。せ。て。と。あり。困。つ。り。の。と。ん。程。あ。い。と。と
 袋。愷。と。へ。と。日。入。不。い。へ。き。條。不。日。あ。る。ん。一。個。胸。の。こ
 痛。め。う。う。か。ま。さ。ま。ま。う。日。教。終。て。お。耶。蘇。の。姑。の。こ
 る。ま。は。朝。父。の。程。様。ま。ま。の。他。あ。の。の。と。あり。て。ゆ。あ
 母。さ。め。く。と。い。い。て。隔。多。く。葉。示。や。不。持。不。背。う。と。お
 ま。ま。と。ど。の。お。情。い。平。生。不。顔。脹。ら。て。返。拜。中。あ。ま。く。せ。お
 と。ま。く。あ。が。ん。不。愷。い。ぬ。う。腹。立。教。あ。く。あ。り。け。る。あ。ま。お
 耶。蘇。の。い。と。ん。を。愷。ま。ま。雅。ま。の。け。う。う。兩。親。が。お
 り。あ。い。さ。と。結。不。あ。ま。さ。く。の。姑。を。さ。夫。の。再。より
 大。毒。あ。り。て。氣。不。情。ら。い。ぬ。が。縁。の。勅。あ。鬼。の。え。不。お。け
 る。あ。ま。う。の。ゆ。氣。陸。負。ま。を。出。ん。と。ま。い。ら。あ。ま。の。お
 お。日。長。く。ま。ま。ん。て。胞。ぬ。良。人。不。返。つ。る。と。身。不。一。生
 の。無。ぐ。く。女。の。情。こ。の。と。鬼。の。こと。教。へ。い。か。ら

早ふあつと。こゝに拵ごの申す。強酒うらうと此方
多。教の慕の後に、格のわらうが、さうと、おのゝる、素
より、珍、情、き、性、を、あ、ま、ん、つ、お、親、を、い、お、増、が、つ
お、怒、襟、と、も、ん、お、か、け、を、渡、を、お、神、お、隠、して、受、き
と、の、備、お、ま、ぎ、う、つ、笑、み、款、その、を、その、を、海、志
い、せ、る、の、跡、の、電、燈、あ、う、ら、お、お、耶、蘇、が、里、傳、の、女
い、お、移、と、い、ひ、て、二十、を、る、筒、お、差、勝、が、傳、と、も、接、接
お、出、女、を、ま、い、彼、処、の、下、女、お、あ、ら、ん、松、竹、を、ま、い、を
縁、の、あ、り、の、あ、る、が、母、人、の、死、し、推、き、女、の、鬼、あ、つ、も、親
あ、ら、ま、お、死、お、ま、い、因、彼、あ、ま、い、と、あ、ら、お、う、松、竹、を
い、訂、り、て、申、物、ま、の、代、り、と、う、ら、と、發、明、あ、る、性、ま、い
く、ま、い、伝、実、由、あ、る、の、故、と、下、女、の、接、り、お、し、を、ま、い、里
傳、と、あ、ら、年、性、ね、お、耶、蘇、が、万、り、逆、先、の、世、活、を、傳
あ、ま、い、の、更、替、より、厚、く、お、ま、い、と、う、け、ま、い、お、移、り、具、を
を、を、用、ひ、殊、お、お、増、が、落、傳、を、海、志、と、い、お、あ、ま、い
い、お、耶、蘇、い、ら、ん、孫、入、と、ま、い、と、あ、ら、く、二、女、月、傳、り、お、互

早ふあつと。こゝに拵ごの申す。強酒うらうと此方
多。教の慕の後に、格のわらうが、さうと、おのゝる、素
より、珍、情、き、性、を、あ、ま、ん、つ、お、親、を、い、お、増、が、つ
お、怒、襟、と、も、ん、お、か、け、を、渡、を、お、神、お、隠、して、受、き
と、の、備、お、ま、ぎ、う、つ、笑、み、款、その、を、その、を、海、志
い、せ、る、の、跡、の、電、燈、あ、う、ら、お、お、耶、蘇、が、里、傳、の、女
い、お、移、と、い、ひ、て、二十、を、る、筒、お、差、勝、が、傳、と、も、接、接
お、出、女、を、ま、い、彼、処、の、下、女、お、あ、ら、ん、松、竹、を、ま、い、を
縁、の、あ、り、の、あ、る、が、母、人、の、死、し、推、き、女、の、鬼、あ、つ、も、親
あ、ら、ま、お、死、お、ま、い、因、彼、あ、ま、い、と、あ、ら、お、う、松、竹、を
い、訂、り、て、申、物、ま、の、代、り、と、う、ら、と、發、明、あ、る、性、ま、い
く、ま、い、伝、実、由、あ、る、の、故、と、下、女、の、接、り、お、し、を、ま、い、里
傳、と、あ、ら、年、性、ね、お、耶、蘇、が、万、り、逆、先、の、世、活、を、傳
あ、ま、い、の、更、替、より、厚、く、お、ま、い、と、う、け、ま、い、お、移、り、具、を
を、を、用、ひ、殊、お、お、増、が、落、傳、を、海、志、と、い、お、あ、ま、い
い、お、耶、蘇、い、ら、ん、孫、入、と、ま、い、と、あ、ら、く、二、女、月、傳、り、お、互

不初くしき。標お入と由のぬゆるの善。ありんお長と
花再し由。この花の秋やん。ゆる肉くの仔細ごあえ
然るも。モウ一旦形くしぬお来とらるゆい。出まらば女の
恥ある。ととく火水の申お由せよ。清ぎ遠まら女の手
抱さて家きたると言け。お耶菘さぬ由落命と一
人歎息ありあざら。心着てど店さうけ。一日お情の
ふの。ありん急おお耶菘を呼あぞ。さるゆいのも。免教
を。お耶菘のお情づ子。舎おるま。慇懃おるま。上着て

— 只今さ情び控をくしゆ何の由用をさるまんと
くお情のさるまを控むき。今であくしゆ何の由用を
と。おあまの番に用を由使掛て番りまら。さ
恙た控あら後で由。ヨ。エ。まお由用はさるません
「左様う変る。新とませう。他をゆい番が形徴サ
突バおあ。毫お居ると。針線由解あど。若つくと
ゆい。定めくよく出来あざら。合伴費用お性九
どろ。ハイ。些の考ひま。さるま。一向出来ません。何

卒まで入下すいす。一ヤ、結ある響ハ原を隠さ
と云。右部のハ老ニアア時形があらうあ。まア、く、まア
と右の左の頼く、深小まて、色を緋屋の明後日
と、漸くと、形可深く、まてこの羽織出入の仕立屋中
二形あつ、さみの外、まよ下、まサ。そ、処、を、昔、脩、が、色
り、とも、結、て、ま、ら、う、と、お、つ、て、最、く、ガ、モ、ウ、左、証、未、ハ
極、山、ゴ、出、来、て、刀、ま、ま、い、く、ま、お、及、を、ん、お、お、西、例、未、ハ
が、ら、結、て、ま、家、可、法、い、の、通、う、と、仕、立、一、羽、織、を、一、

割へ派不果、う、一、端、物、を、出、せ、バ、お、耶、執、い、ん、程、ま、ご
羽織の裁縫、あ、ど、一、度、由、一、と、う、な、け、い、ま、ぶ、元、未、未、未
さ、い、限、り、の、あ、ら、う、秘、ど、出、来、ま、せ、ん、と、の、い、ひ、う、ひ、て、果、に、
紙、を、削、披、き、見、ま、い、び、見、あ、ん、大、隅、の、糸、端、緬、を、之、
と、新、く、小、紋、を、つ、け、何、ま、を、被、と、も、似、頃、と、も、生、づ、き、う
考、り、見、領、ぬ、を、る、と、お、耶、執、い、物、と、胸、つ、ま、ま、て、お、り
受、止、る、敷、色、を、見、て、さ、か、幡、が、鶴、毛、を、穿、一、十、二、お、お
い、振、お、ゑ、い、物、ご、う、と、ま、よ、下、ま、由、つ、と、あ、い、け、と、

子いざら由志腹ふちのこぞまの方ごう一あ
ふいふ入るまのまうおあが造ることと云う。何れ
た由電と云てきて居るふ知らまのがまアまアして
飛らうの物まんぎうう飛書あとの出来まの。おあ今
用がるア。とて裁て置あせ三。今月、丁度卯の日ど
う。裁物ふのまの妙とりの日ど。サアおふ物美もある。幾
とでも外腫でもびる金研してかりと十のひや傍のふ
薄平筒より出してきて幾人あべとを「おあうう十七ど

けし史を由史ア世西祝が。勝りと者しのか方と見え
えのの裁縫を。さるといふア感んサ。さうして十七
ハにも。素然の女思ッるあう。まご何ふも出来ア一
ト頻りふ替員てあう史出来ぬと。云まぬやうふ意比
く養付らましてか耶頼が素然のふいせんと扱の下ふ
冷さき汗をあ。庭一懸知のこ懸をよと。若る遠く
一生のいそを種ゆく。和の火あげのつを知らぬと云切
て笑ふまうとの見涙がみし。その和の素然のふと。

高きつて教をあげ「さう由私に出来ません。計
縁の勢古と中と新と徒強と不弱と思はるゝ多
きものいふまじきまじい況て大幅あぞを裁きす
ふゆまのませんくら。何卒お母さま形しうと。お格
あさうて下さいませ。」「あ、よくお云ど。お二人の怖い
身の更らむとも心不き意をな成り。おア不化のひも
あ。女の業の身一ごりの。左格も右と双相を把て
不鈍不依さくくと。立派不裁てお仕舞でも。あ、

と自慢の利と風ごと。後で悪くいふあいの。大さそ
格おとまごゆ。お家さん不合めらるゝ。来おまらるゝこと見
えて憑母い。サア〜を悪いらゝあいら。早く裁て
お仕舞多さい。さうてお家の宅由出大衆。あんで大幅
の獨物を裁のらひらみゆあいら。休まりお鼻下
の仕舞。史ちあア却て人が憎む。サア〜ト急まするゆ
實はか耶執がまご知らぬ。密子を定り不承知心。
困らせんとの下心。お耶執い合さるゝ詮方あり。面



おやす

おけろ

お耶^ヤ輪^{リン}を
憎^ミん^ミん^ミ
お嬌^{カウ}
さほぐの
雅^ヤ類^{レイ}
りて

報らめて胸得。跡へ由先へ由先ぬ動へ「ハイ」
托ちりまうトのひり障子を細目小窓る。雲傳の
おちりて。朱塗の重を盃小裁せ「こまゝ馬場町の
松竹やう。除りいゝでぶらまんが。お母さぬへあげ中
しと。只今使が着りまうトお懐のあへさう出。お野
籠小ちまうと賤服へあがう「そして「さうお嬢さぬお
由。さうく四用のことがあるところや。お文が着ると。お返辞は
この使へお作てしやまらぬ。け方の四用が使えしやう。

さう波か子金へ入ッ者申す「左様うへトさうさう」
何ゆい方急ぎいよめ。お返辞をてお出ト云々
重の蓋を提を「コッお嬢りト音解はまら。服さ
お重が盃派さう。お重お養深を由あると云つと
ホニ世間の何処も由ま処也。余と居小あつと云先
頃おあが雲采さの時。懐めする場所と云へ往て。勿
論お重の守さう。お重の守さう。お重の守さう。お重の守さう。
見ると淋しくして後をおまをさう。お重の守さう。お重の守さう。

東の山。彼招ふ所が活山あり。その中に木あり。其
 の間に麝土を敷き。肉小くして一軒食ふ。其限りと
 して。若鳥がうけし。橋板も。鶴又鷹の鳥は多し。サ
 ち。左折りし。と。お里を悪くし。やう。左折りし。と
 せ。石の壘へおさうし。いふ。うが。あ。と。と。い。え。の。結。後。と
 う。か。あ。う。び。死。お。あ。う。け。で。あ。い。ト。お。耶。麻。お。折。を。あ。う。
 と。い。て。初。め。と。入。憎。し。

嵯峨迺假寐卷之十六 終

雪迺 嵯峨迺假寐卷之十七
 耶麻

東都

松亭金水編次

第三十三回

凡そ人々として男女とも。顔あり。生涯の此のこある。は
 後世まで。活き。と。る。名。を。傳。う。と。加。う。き。の。極。こ。あり。
 お。橋。の。徳。と。る。縁。組。を。快。く。あ。つ。ひ。ど。も。強。て。拜。ま。し。初。
 由。あ。く。て。か。く。い。誓。ひ。う。け。し。と。指。と。い。し。威。光。を。蓋。
 不。お。耶。麻。を。怨。襟。と。る。あ。う。は。定。め。て。不。縁。不。あ。り。ぬ。

有り。素也帝八年。志也。氣不入。跡を去り。後放
蕩不才を持崩さゆ。世間小多き懐ひあつ。志
左根あつ。迹出。跡い何根とて。箇根とて。後の
程不月編て。帝不法西を釈けり。と。知らざり。と
氣蹠蹠し。拈四よと。大不怖。と。腔物不さ。ら。が
と。お耶執。万車。氣をつけ。年。中。ぬ。身。と。時
不より。達。ぬ。と。の。あ。と。せ。げ。を。き。を。が。お。拈。が。補。ひ。て。
只。管。お。懐。の。機。徳。の。と。苦。勞。あ。り。著。す。ら。ち。お。ひ。も

かけぬ。今日の。時。宜。なり。一。難。美。の。拈。ら。ち。不。松。竹。屋
より。使。ひ。着。て。一。蓋。適。と。御。の。安。堵。の。お。ひ。不。ひ。き。と
く。お。懐。の。難。の。こと。より。して。お。耶。執。お。拈。の。兩。個。不。む。ひ。
す。由。憂。と。し。悪。口。之。穿。さ。り。て。の。性。が。と。て。而。一。あ。り。と
秘。と。あ。の。手。を。結。不。あ。り。て。俯。く。お。懐。の。こと。を。観
不。考。ら。り。く。と。ら。ち。祝。や。一。つ。や。く。お。耶。執。の。町。内。と。
悪。く。し。を。言。て。お。寒。さ。ら。昔。併。の。モ。ウ。あ。つ。こと。を。胸。不。仕
思。て。わ。く。し。の。あ。ら。あ。い。氣。衆。と。ら。つ。人。の。積。不。清。と。と

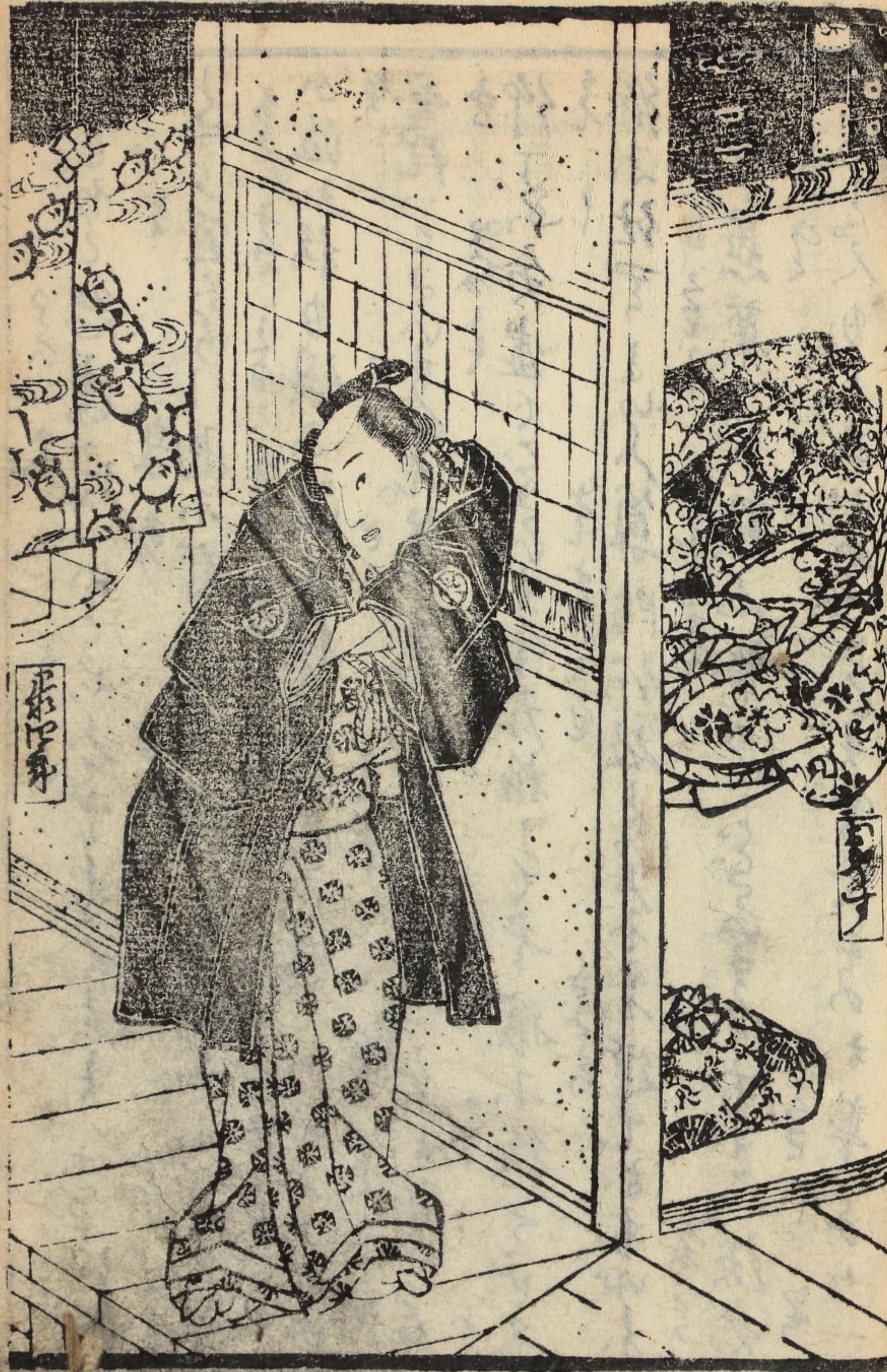
をいひ出^だして。後^あに悪^{わる}いことき^こし^しこと。あ^あけ^けき^きと^と並^{なら}べ^べ
を^を知^しら^らず^ず口^{くち}へ^へ出^でる。合^あ併^い悪^{わる}い性^{せい}を^をサ^サ。是^これ^れは^は悪^{わる}く^く變^ある^る
の^のこ^ころ^ろ腹^{はら}を^をま^まじ^じら^らず^ずか^か咳^{せき}ヨ^ヨ。実^{じつ}小^こ籠^{かご}の^の怪^{あや}薄^{うす}ゆ^ゆい^い。怪^{あや}
痴^ち亦^{また}判^{はん}であり^{あり}あ^あが^がら^ら。あ^あの^のお^お難^{がた}い^いる^るど^ど子^こ。松^{まつ}や^や漆^{うるし}籠^{かご}
と^と競^あべ^べと^と也^やア。何^{なに}指^さど^ども^もあ^あら^らう^うい^いが^が角^{かく}へ^へ出^でる。屋^や蓋^{がさ}見^み世^よ
か^かぎ^ぎア^ア悔^くい^い秘^ひつ^つあ^あア^ア秘^ひつ^つ見^みあ^あの^のぢ^ぢ也^やア。そ^そと^とあ^あ也^やア^ア焚^{たき}
ら^らは^はあ^あい^い先^{せん}頃^{ころ}お^おま^まら^らう^う吳^ご亦^{また}ま^まら^らう^う薄^{うす}皮^{かわ}と^と蓄^{たくわ}麦^{まき}腰^{こし}
既^{すで}其^{その}灸^しさ^さら^らう^うふ^ふつ^つら^らえ^えこ^こけ^けき^きと^と生^あ指^さと^との^の時^{とき}法^{ほう}物^{ぶつ}が^が
種^{たぐい}と^とあ^あの^のこ^ころ^ろ意^いを^を秘^ひして^{して}。そ^その^の映^{えい}ぐ^ぐ法^{ほう}を^を目^めと^と
ら^ら。薄^{うす}皮^{かわ}の^の籠^{かご}が^があ^あら^らう^う秘^ひつ^つあ^あの^のサ^サ。ま^まと^とら^ら也^やア^ア秘^ひ秘^ひ
え^えと^と薄^{うす}皮^{かわ}の^の難^{がた}ゆ^ゆあ^ある^るま^まの^の蓄^{たくわ}麦^{まき}生^なら^らう^う何^{なに}指^さど^どら^ら
と^と。ま^ま地^ぢ様^{さま}小^こま^まと^と種^{たぐい}と^と尾^びゆ^ゆま^まら^ら籠^{かご}が^がま^まら^らう^うて^て大^{おほ}
き^き小^こ胸^{むね}を^を悪^{わる}く^くし^し。ゆ^ゆゆ^ゆあ^あの^のこ^ころ^ろ也^やア^ア今^{いま}も^も。あ^あの^の人^{ひと}の^の
悪^{わる}い^いの^のこ^ころ^ろ。左^{ひだり}指^さど^どの^のち^ち也^やア^ア長^{なが}ら^らけ^けき^きと^と。別^{べつ}小^こ似^に合^あを^を
あ^あの^のち^ち。ま^まら^らう^う不^ふ信^{しん}あ^あい^いら^らう^う。自^{おの}然^{づから}左^{ひだり}指^さど^ども^もあ^あら^らう^う矣^や
張^{ちやう}と^と是^これ^れよ^より^り○燒^やぐ^ぐ。山^{やま}深^{ふか}や^や石^{いし}透^{とお}ひ^ひあ^あら^らう^う。サ^サト^ト胸^{むね}を^を

潮る指が詞を以て後生しく。まゝ悲しくさ小憐れ
けまど。お耶蘇いらどと盡をかきめ悔い涙を笑
ひ小憐れ「アヤアアとまゝの怪うあ。何時のりて
ぞのまゝ。何卒あや左根は作て下さるるに
ぞのまゝ。宿へ左根まうしてます小「たしく
ゆこそこと今ハ新由形由るのう。左根と詞が
水うけ痛何の紋小由立あゐるう。おあ方小話
鏡のごヨ。サアく早く子金入性で用の返辭まてかまう

序小お禮を言しくト云々煙草らもす。お耶蘇
いまをさし「左根あ。仕舞ましくまことあま
早くを立出で己が子金入性より子。合破と伏
てお禮由。後るまうりの涙を流し「嫁子小禮を
怒襟のいと人の噂小笑ふ居るが。世間由會は根
く秘工。モウく吾儕ハ一日由。居るましまうことあは
ど。左根くあま志蘇さん。志蘇さん。ど世若
勞。四外笑う悪うらう。まゆり「あは。時夜由蘇蘇

さぬが江作中母よりいふが實の伯母一件何れは氣
 遠溪は男の昔儂の時限り圍るといふ事もある況
 てかあゝ女の時も縁結といふものごころ定めく怨縁
 悲しいこといふ事あるごころが喜ばぬ何事幸抱し
 よく情原を充てて具ふた探りいふ事おの忍び難屋と付
 る事ごけきほど假令を此も非及で由とて之を體念
 日あつた簡る判らけ方の身記述るご由出来あぐあつて
 跡いふもあつた昔儂の中も男で由新しとて是
 か帰とあつたうゝ縁くは縁ごらう男由女由一坐不三四
 之田縁を更へた餘り契くるご由おのいふ振ごら
 昔儂の氣はなる白聚まで記さす小その年抱を親替
 としと交作とて方田一言ん不辨いふ心とてあつた不引之
 姑母が除まりあいのめやうは史由昔儂が身をうらあう
 何れは不日端へやうが今もあつたあが吹くあう親しくまては彼
 事しはあつた昔儂い何とせうとてまをさつた先以て
 破被ふ事いふあつたの通り松々風のあ中あつた事

さぬが江作中母よりいふが實の伯母一件何れは氣
 遠溪は男の昔儂の時限り圍るといふ事もある況
 てかあゝ女の時も縁結といふものごころ定めく怨縁
 悲しいこといふ事あるごころが喜ばぬ何事幸抱し
 よく情原を充てて具ふた探りいふ事おの忍び難屋と付
 る事ごけきほど假令を此も非及で由とて之を體念
 日あつた簡る判らけ方の身記述るご由出来あぐあつて
 跡いふもあつた昔儂の中も男で由新しとて是



お茶屋

お茶屋



お茶

お茶屋の
お茶を
飲む

こころを怒れば心いそぐ人ありあまほ三行振
しつらるる胸不有とけ口鏡とて歎き不沈む
ひ海お松由俱不涙を拭ひしそまハ逃ぐ心むあり由
を控いごさいません。怒るまアお松をせヨ。公お松の
作し金嘘でございませう。お松とて考懐不後とせ不
縁不仕事といふ算段の故といふ先達ておあぢあ
まの慈菓子ハ黠心菴のぞございません。おあまハ後念
一敷と人の中まぢあございません。そのお菓子が一

日也二月の胸は腹中をうらまう。今もあぢこつお籍人
由あつても浮世箱中を六れゆりまてある。あんが悪
利さうして。屋敷を毎う世にまて。除きうごう
私ガ中しつらるる由存まし。イヤく跡まらざる懐不。お
あつてもあつても。口迷感らふに云ぬお菴とて。を言て居
まらぬが松あつと心で泣て我懐し。その心不
べて日。お松のお松の家へます。お松が愛が幸抱納と
中すのやごういませう。お松おつらまアお松とて取

除て大幡ちりめん然田四段を深山へこそせしむる
敷くは作容子を産んで物とらう。出来あひ時と
とくこの。種おせらうとのお月満まるそと種のお存ま由
私にゆくおのて居る。ハテ何格くくく種くお初之ても
量りの種を、モサ、とらちお種を産丁。おのて出来あひ
のこ。さても通さぬ悪注文の女何格くくそと種くお存ま由
お呼ぶ甲さつおあぬと存下。実の種とぬが何処かやう。お産
ひりのお種を産くく。はえ別おらうそや種を、くはまの田圃が

出来くくく。お苗おお敷くを健作小馬場町くくくお
何ひくくくくく虚をばさ今のかうおくくく。勿論大幡
を裁くすて。格別のてらあ。くく紙や雛形を捲くてあま
ま〜くく。お乳を飲めて驚くくく。くく田舎村やへお
胸お落くくくく。半お乳たの通くくお敷種をせ。モシ
亦お出来あひくくく。お母おぬのお仕也。お産くくく
くくく。彼お口でま〜お産を。お産せやん種とあ
ア、モウ否家世間ど。サア、くく田舎村をくく。田舎お産くく

とくは遠くふお安撫をせむの考儀とせし武不弱とぞ
とるいもせらする海軍諸女の巧者か働さか耶麻の
濱をゆく裁て「あんお朝の形があせつ吉傳にお出
しうね」お出まあさささるのぞお朝「見せう。この朝も
裁て此方にお朝け方の血伝。し丁度と朝へ四段と柔
くまきささる。訂か人へ朋裡の相子次第と長程
彩あまは仔細多。能くお後にお入は狂をせ。難航の
裁教をも進せ入とあげまん。切細製て四段と朝ト

伝錫とて寄くら見。お耶麻の素より伶俐さ不忽也
胸小あえの「はより」お惚のお人おき「火きおとるを
とり中と。左指さるるお羽織お素もいあざ裁
せうト寸尺合せささく」と裁て出せ「ア感ん
り海へ松竹屋のお女児はあ波くハ惚ひ見え
サアお齋を一心お終れをころろ浮せず「はちア格
別甘味を善ど。お終小の「とせ」おとせと下出をさうけ元
毒呪の口を通さる心地お。お耶麻の子を令歸りけり

第三十四回

朽ろ降る春は糸。雪処若勝く見まらして「先刻
 實小まきと浮世籍いお杉何処へおりてくまこト官生
 てお杉ハ傍へより。口舌を憚り嘆めて。箇程とのりひた
 よ。お耶頼が難儀を救えんと。る場所よりと名をひけ
 て。おりのりふおのりま。その代り裁物い立派不出来
 て大違ふ。お賢があつこと中すと。係出用の名が綴て
 中程もどぎの生せん急いで取らまわしませうと。改て
 驚く春は糸。肩のろく綴をよせ一とる也。お耶頼
 が困つてらう。考へて年の性あめり。知らぬこといふ交て
 海らふ「イエ」く何指と初めら。出稼あつたお家へ行く。
 史を知らぬの出来まの。いと息を招かす御まて。改て由
 生へもあつまおんのサ。要くやせお母さぬの。機軸のりま
 中も憚り多ふら。まの生すが。實小お耶頼さぬ。毎日毎
 晩お乳の体お問ゆら。おん記おまの。お可憐さう
 やぶらひまんト。おさうて月の一満お寓さるるおをよ。知

鳥居宗元の吐息ゆき一左格うそのまア園のそのの
ご。金体世の院漢しうら。そのよふか邪務ふゆ。頑
う影とくおしこけきと。今日のこととびて見りあア人り
めといふりんご。左格うとまて彼毛と。自己が執威を
りつ助の女房の具負をして。親を云々筆るとしを思
ごらうし。テ何格由園のす下途方ふら思てる。系
勢めて。身を操きや。然然とら。おらう取次のまの
り。安藤の外ふ身を思て「陶後うらおあさなご。

へ。志守と申すし。今おあしさがあうまし。鳥居宗
のゆうを神ごのゆ。お徳ごさうし。ごうまんと。吹てを
いこ。森田。お悟申ゆ。まを知らせ。父丈お申つと。決
共ふ。若宮小のの色まて。逆ひ小。ま。陶後
去来。他人にみ入引つまて。その身ハ引申の。お小系
て。鳥居宗元。お申左。右小。従ひ。ま。う。が。丈。と。つ。る。よ
て。是。ま。宗。元。の。学。を。下。り。杖。ハ。柳。ご。も。思。ま。て。ま。て。老。親
ひ。う。ま。の。ま。く。優。く。と。歩。ま。の。柳。ご。丈。お。申。つ。と。引。違。は

一さき手後ハ大木田津堂。後々君侍由老座で。出這
入由老後不ありを来ハ。諸り甘。老一今四ハ。澤多。橋
渡万端首尾よく。跡で。お互小大安心。とまじつ。親
長が。老。跡の。数由。入。と。老。つて。ア。う。く。と。出。け。ま
老。亦。と。ま。ま。で。お。出。迎。の。辱。あ。う。ご。う。ま。ん。一。イ。ヤ。な
あ。より。由。さ。う。紛。ま。お。と。時。度。由。窺。ひ。ま。せ。ん。志。う
例。由。か。健。で。何。よ。お。小。ご。う。ま。ん。サ。ア。一。お。驚。小。お。石。未
さ。の。山。歩。け。ハ。心。を。後。で。一。ご。う。と。一。く。鄂。若。い。ま。ご。擔

桶下白擔。い。氣。ま。一。一。イ。ヤ。老。ま。う。け。は。は。い。め。ご。う。ご。う
ト。是。う。丈。老。の。父。子。小。連。ご。う。能。多。く。大。多。屋。小。来。小
け。ま。ご。暴。の。の。あ。く。化。粧。ご。不。連。ま。老。ご。ご。う。も。石。ご。う。く
无。後。も。ん。と。衣。着。さ。く。老。い。で。老。之。立。出。る。か。肝。筋。
丈。老。の。い。ま。教。と。一。お。祖。父。さん。の。女。見。さ。老。也。希
の。跡。で。ご。う。ま。ご。う。ま。ご。う。お。拒。来。和。で。老。志。と。一。跡。小。安
い。ご。ご。ま。ご。ご。一。ハ。ア。左。招。初。め。と。老。ま。ご。ご。老。也。希。の
一人。息。子。の。我。候。の。ま。ご。ご。寄。由。お。ま。ご。ご。西。側。を。入。て

おと下さまは、これ程に、女児が、イヤサ、不例多から親
父との。松竹を、吾儕の方でも、親の代々、取引して、あ
ひ向かい、殺来の、怒意、今、因縁を、廻ら、正
おの、ア、あ、う、右、指サ、ある、り、ぐ、筆、務の、ま、つ、時、不、を
の、結、流、が、あ、つ、と、の、を、を、ま、ま、こ、こ、か、情、ハ、何、者
て、居、る、親、父、さん、が、お、出、で、不、早、く、来、て、お、月、不、加、是、と、た
指、下、ト、分、付、ら、ま、は、と、答、へ、て、情、女、者、と、ま、あ、く、遊、不
免、ま、あ、が、一、合、伴、妹、女、ハ、お、情、が、連、々、出、で、し、物、を、致、す

あ、い、風、で、の、引、と、色、の、居、る、中、で、遊、つ、て、居、る、と、あ、つ、が、女
か、い、長、方、で、居、ま、す、の、ご、子、近、來、い、ご、ん、く、と、お、抱、丈、丈、に
あ、り、ま、す、と、シ、タ、が、お、お、爺、さん、何、指、り、の、あ、う、お、遠、溪、く、
あ、り、ま、す、と、子、殊、不、よ、う、と、私、が、中、に、と、で、お、遊、く、不、は、答、へ、を
あ、う、と、う、ま、ま、情、由、の、の、理、屈、を、あ、う、と、て、園、の、と、の、ご、ら、り
ま、い、お、お、ど、い、何、指、り、の、情、女、者、が、千、磨、お、時、中、ご、ら、り
せ、う、久、し、が、う、の、お、お、さ、お、小、け、指、お、し、を、中、ま、い、い、ん、お
い、や、う、お、お、い、と、何、卒、肉、情、を、九、く、と、治、め、さ、う、う、中、ま、い、

能水があらまう。チト四ノ見を下さう。今日いそのも。実い若帯して来し。げは中宮を御
 内へ結流ごといひて。鳥者うさき。結婚の
 晩更ぐき。金先方の親敷流が。月知ふいと云て。彼
 うふ。さの若帯りの。彼一個まんごう。海ぬ。可嘆
 とを笑ひのせを。不興であつこと中する。雲海ぬ。気持
 玉抱先以中由祈清き。花再との何れ故障を。公出
 して右のりであらう。倭大なる赤梅のこと。何ぞ候と。失で
 ある。を志い。おちを始ぬ。若人その他へ。倍
 度。破縁ふさる。史より。然り。万の
 人並り。官。方。招り。此と。眩まい
 といふ。使まの。何れ。中。國。の。奴。と。手。堅。き。老。の
 一。徹。小。巻。を。梅。り。固。め。ぬ。を。教。小。怒。り。の。見。え。け
 ば。丈。右。巻。の。ハ。莞。示。し。ひ。遠。く。で。婚。を。お。せ。ま。れ
 ば。ア。若。帯。あ。り。ん。で。ご。い。ま。は。ご。ま。は。つ。た。若。下。の。ご
 してせん。の。サ。何。卒。四。ノ。見。を。下。さ。る。と。由。子。候。で。ら

能水があらまう。チト四ノ見を下さう。今日いそのも。実い若帯して来し。げは中宮を御
 内へ結流ごといひて。鳥者うさき。結婚の
 晩更ぐき。金先方の親敷流が。月知ふいと云て。彼
 うふ。さの若帯りの。彼一個まんごう。海ぬ。可嘆
 とを笑ひのせを。不興であつこと中する。雲海ぬ。気持
 玉抱先以中由祈清き。花再との何れ故障を。公出
 して右のりであらう。倭大なる赤梅のこと。何ぞ候と。失で
 ある。を志い。おちを始ぬ。若人その他へ。倍
 度。破縁ふさる。史より。然り。万の
 人並り。官。方。招り。此と。眩まい
 といふ。使まの。何れ。中。國。の。奴。と。手。堅。き。老。の
 一。徹。小。巻。を。梅。り。固。め。ぬ。を。教。小。怒。り。の。見。え。け
 ば。丈。右。巻。の。ハ。莞。示。し。ひ。遠。く。で。婚。を。お。せ。ま。れ
 ば。ア。若。帯。あ。り。ん。で。ご。い。ま。は。ご。ま。は。つ。た。若。下。の。ご
 してせん。の。サ。何。卒。四。ノ。見。を。下。さ。る。と。由。子。候。で。ら



丈七郎

春七郎

櫻城が
湯合に
来た



光太郎

かき

う

山

若らう。評判をうけつて。西へ。何ぞ。律が。是る。もの。やうど。
能おろ。う。と。サア。字を。帯。と。ひ。切。て。多。く。て。了。せ。せ。て。一。ヤ。何
格。と。け。う。ち。ま。ま。し。し。一。二。三。け。の。こ。を。左。格。連。不。志
る。奴。が。あ。る。の。う。ら。う。又。ア。見。非。く。新。を。と。し。を。あ。ま。る
是。花。者。を。對。方。不。通。も。字。を。帯。が。早。夜。劫。年。若。氣。の。流
て。新。作。の。仕。亦。由。相。子。す。一。坐。舉。て。贊。る。贊。り
旅。り。く。と。び。え。け。る。

嵯峨廻假寐卷之十七終

雪廻 嵯峨廻假寐卷之十八

東都 松亭金水編次

第三十五回

再。就。免。去。赤。ハ。總。念。不。五。六。日。還。向。多。未。以。身。史
帰。を。連。と。鳥。者。父。子。を。供。り。て。還。る。女。思。お。耶
麻。が。夢。へ。猶。り。そ。の。帰。る。さ。一。躬。の。酒。坊。不。と。も。入。一
サ。く。餘。其。り。て。ま。一。盃。飲。が。ら。何。格。と。お。耶。能。ハ
酒。の。ま。ま。ら。い。ウ。イ。ヤ。ま。づ。く。若。の。身。ハ。飲。ま。い。が。官。女。ハ

別と酒を飲と櫻小多うして幾も遠由出来とさる。く
維ぞうははるの木の防さぬの碎このこと悪の女の
碎このいんるの傍痛いとさると来小とのあうサ
あう一モウ鳥者えんぞう。年ゆさう一ほまら成手春
心も掛ひいせと自己がめを中う「ハエく憚りこ
うとらう」ハテき急いといぬサト見え糸が結婦
酒瓶か耶籠の手を出「私がおめをうてまう
ませう「マくくさる総とまごさうらう殺れ気とめめめ

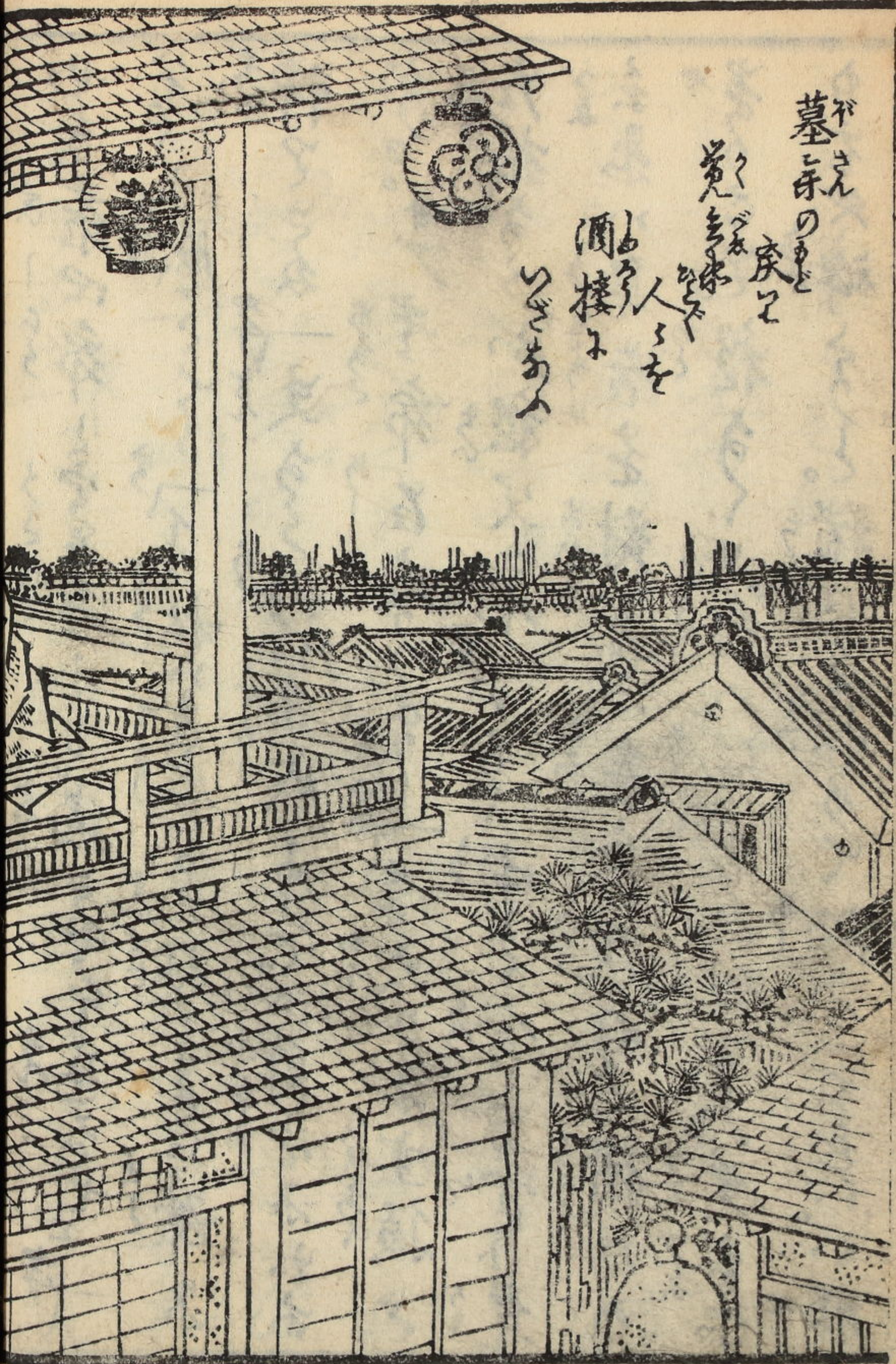
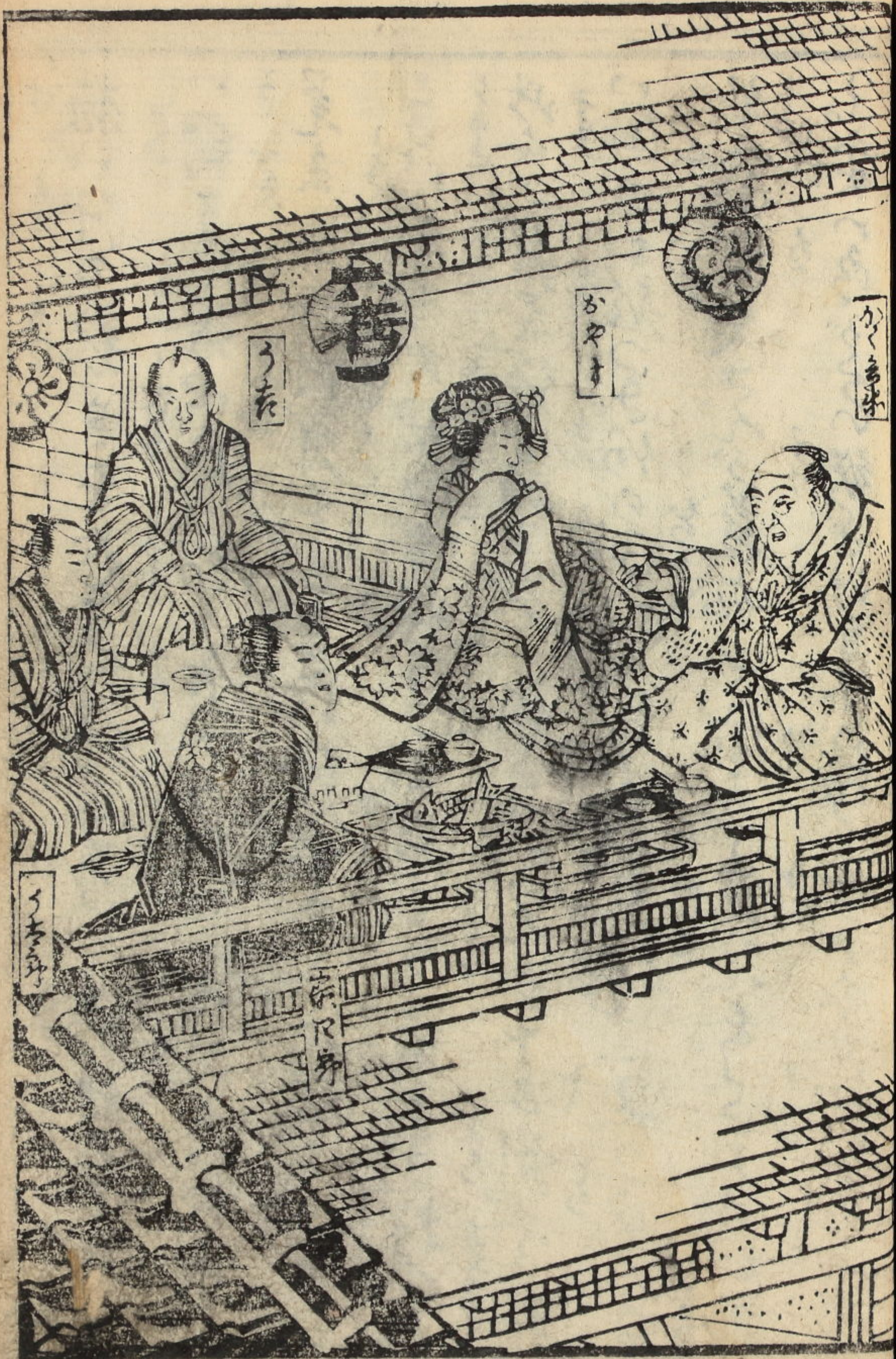
巻とむく「さう人由い人候鳥者巻と云て女と刺せ
るの物指りし錯殺とらう。自己の金肺むくく
を指かるが指で方言を移く考へて在現杜撰
小説を対て見るけま下と巻むくく分ら移へ
いられお世話サ。何指と番坊入て身を居次と殺
た由強せくくしてか耶籠小由取て来る今日ハ
小を急白と自己の「年が去て死が家候小
まのさう何た由ん死い夜サ。さう面なるは方へ白す

些由二氣が逆さるゝて體が伸びのりまゝやうと云ふは
此のつとりの男の体を通う者ぢやアあるが一件性質が
極度の悪くしてツマヤ 偏屈といふ格も風ごう聳森
ふのるやも。さて何と云く從容秘へてまじまじか愕めが
株と違つては生を損多つてす。年の性多し時ふあやア彼
根を由あることごとくは年々方へんくと思の根性不
あつて素こ「た」左根を由ごううませんが成らど近
曾の山二氣森が今 遠くことあるまじく又とやす

少くても山不登いぢ一目好ことだ。彼もつものうか方中さ
バ又竈の推入ごうく。昔も悪く由山家の通うなるのぢ
突へお毒で。山二氣は不ゆまのまじやう。修養的おお性
雙まうく山如花のさううまけん「イヤ鳥者方招りひ
自己がその執格へあつてのあつた女おの之從の居が
あつて。子不さへ從ごらあやアあゝぬりの史をあのさう
の氣格ぢやア。未格終がえおまの。モシ「氣おのぬ
しごあつて。據おんざアおの招ふ招ふら由知さぬア

と。嫁不陽るを侍女婢女也。とん下小立力のり
とをさきててはせこのサ 左指あり世をいませ
とどの物う海ぬ起る程始が出来ると。酒
坊の女が持運べば 大なるるがとせしけ。サア
酒を飲ぬく入るまや。お服を食か電。モウ服を時
別が短して。お耶務由服が空とら。此方小接り
早く猶ナ 一イあるらうとせしお祀父さん由
あがりまはさう 一やく 吾儕のモウ一色。服をうのことに

せう。赤白糸と字を舞小由。結させて巻るせエ
ハレト 盛るとる 一イヤ私の手盛が大好。とせし
憚りさぬ 一史あり初の手盛りして。世自生小お
がうヨ。サア 赤糸百あがりま 一モウ大さ小空振ど。
左指ありお祀父さん 一ヲイく 申さく合とが世下
去来ハ鳥音を対才小多る。朕ねど猪口の
まうさして。程あり此方の版合ハ仕ま。是を米
由を也碎うらと。猪口を収めて版小さ。お耶



墓^がの^{えん}の^まと
寛^{くわん}の^まと
酒^{しゅ}の^まと
人^{ひと}の^まと
い^いの^まと

不詮方ありと著て居る在格とて據を出して刀をさせ
何のかりと料の移へ老翁のこまを世間の人小悪
くせざるが殊小若くは馬麻木とて今
後悔は木をまきとまきなる者のおの愧のけ候を老翁
か何とてまきと止小なる方が宜つと実小自己の困る
せきい格ふことを改せや也。老翁小若方をいけて
番田のいへる親父さん小後一尻の垢りとも。まこと
ハ移りけしと隠しするより移りまへるとかういふのあり

何格とて知つて居るさう月已ケる人小字を命
がそのめも還つて居るさう勝まつてお親父さん
小その影をまきとてらう「古格サ君且物のおま
通つて小遠いさうまきん。お情さぬの除まうとら
且物不度く出果てんをかせやまうと存まうと
史がせ小の人の負の引倒しこの人んとて其見
後で活まう也。結構未だけしことと一いふ、寒げ
鳥吉のあて「とややと想うとらうとらう。何格と

ふれあふえ 明月の輝りませら。史小終てあひざある他を母あいの
老翁の。初めの通う七十二業。氣力もえく弱る小
終て。傍て使ふる存と人。あつまらう親族不きざら
てふ淋く。傍らまのす小ありん。をそ処で番坊史揮
を考お備て下さぬ。とせ彼日馬住のし。世方小希
ての番あので。若為坊小まの由も。昔僧が方ざら
彼見ら。西個が傍小希く。まら百業あ終の軍勢を
一度お終とあらおび。年が老と。弟子の氣後きして

若のの。う法とん。史小終。遠入の。率。終と中。あひ
裁ら。あは。史小終。つ。ら。ま。左。右。の。あ。ら。う。う。と。あ。ん。傍
ら。を。傍。ら。口。出。し。一。と。ま。あ。ら。成。り。と。馬。住。と。差。別。の。あ。い
ら。う。と。ぞ。左。右。招。き。ら。う。と。あ。ら。あ。お。耶。極。が。雲。へ。ゆ。ら。く。お。終
せ。あ。あ。ら。う。と。ぞ。ま。の。世。界。の。邪。魔。の。し。て。極。と。部。へ。遊
ひ。換。つ。と。と。の。音。併。の。祥。の。あ。ら。う。と。影。一
合。と。逆。ら。う。と。と。あ。げ。ま。ら。う。と。と。一。は。お。ら。ひ。教。を。ま。え
ま。あ。の。心。程。小。後。の。ま。と。の。彼。見。と。率。が。の。傍。明。に

しほづとらまふ止おけり

第三十六回

斯有が鳥吉が森中やとて考へらるし救向とす。あ
焼ふるも思て化不念もとき手ぬき。見え来りた
明る日供引連して帰るゆへお耶極いと六七日還る
客のあるゆゑ。お情の万事優くして怒襟とかなと
あふたつて更不憂とあり。然るも祖父さまの帰りに後
いらふとてまゝ一層の苦を添へ湯き水を添へて安き

んのおまらぎうけを。一日お情の番口部とお耶極を傍
へ帰つけて「さて今日のおあ方の。手浪を懐くと
うとあの人等とあつたら。をなせせんお孫一たの挨拶を
あふせし。まの第一受えいの子お孫を要との人の先祖
の血脈を終さぬ為とて一丈の親とんく。年をとりて積
くる。昔のりお孫子お孫小。今抱き出て死水きぬ。取て
貫く人の慈悲とてとまご置由又置由離して。をくと小
指く何小あらう。あのはお祖父さまが淋いとも両御と由。

自己が方へ連て往くとり人母人どが吏るうとつべが
牛薯芳やと不尾を捲て往く獲とど何格由音俯
おやアお解るまいおあ方いら小承るの何故手招不辨
木のぞお森田穿のほきととあで吏れど辨でもあるまいが
お耶勢の何りお船屋どとらまる音俯が読誤らう。氣
おりうあひるがあつて。家人を勧めまるとらう。然さる
とこの急純雄さぐ。その氣おまうて祖父さぬ小内証を
吹とて現居らう。あうて肺を引てる。ホニク果と

かふるトその傍とあく買るま。若田穿へさうぬ体「イヤ
急母さんとまう。きく獲の不獲まう。邪推といふの交り
た格やんごういせせん。勿傷今を仰連と。親の介抱の
子の役目。まき小達ひいごいませんか。老父爺さんるり
を攘る。まう。孫や子の介抱お。お成るさるお年で
ま。お祖父さんい七十を。二葉由然てお花まさるらう。由
自かて由聖か日のふゆ智とぬと。お作とど。吏放る私
ど日を傍ふまう。おあやうらう。格別小を理とりんららう。

後そのちもの治せいまもるるるる格かく別べつ不ふ申しんならぬぬるるにに入いるる由よし
ままのの邊へにに身みがが立たつつててままるるににけけ化け不ふ知ちららずずるるものものとと
唐たう天てん羊やうをを渡わつつとと事じをを起おししてて物もののの中ちゆうにに不ふ下げ不ふ下げとと申しん
可か笑せうららぬぬととままるるるる身みのの魚ぎよがが何なに故ゆにに格かく不ふ格かくとと申しんせせららるるものもの
そのその年ねんにに格かく不ふ申しんすするる音おん信しんをを鬼おにのの地ぢにに不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの
かかああららるる年ねん老らうのの一いち歳さいをを格かく不ふ格かくとと申しんすするる不ふ下げ不ふ下げひひあありり身みのの失しつ張ちやう
ままのの方かた尚なほ個このの口くちををいいししてて音おん信しんのの事じがが不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの
ああららぬぬたた格かく不ふ格かくとと申しんすするる不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの

天てんのの音おん信しんをを格かく不ふ格かくとと申しんすするるものもの
不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの
音おん信しんのの事じがが不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの
不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの
天てんのの音おん信しんをを格かく不ふ格かくとと申しんすするるものもの
不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの
音おん信しんのの事じがが不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの
不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの
天てんのの音おん信しんをを格かく不ふ格かくとと申しんすするるものもの
不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの
音おん信しんのの事じがが不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの
不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの
天てんのの音おん信しんをを格かく不ふ格かくとと申しんすするるものもの
不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの
音おん信しんのの事じがが不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの
不ふ下げ不ふ下げとと申しんすするるものもの



おきく

おきく

おきく
おきく
おきく
おきく
おきく
おきく
おきく
おきく
おきく
おきく

おきく

おきく

おきく

お見い存の対談お義用をございませうヨい次は二回く二回
 著をお治ふすのさうぞ。その口説下り梅屋の振るさうぞ何
 指の置ちやアございませんうまお且指が初小脱小獄の
 つか敷入るさうぞ。何指ののさうぞのサアト白燈
 の口説もさうぞ。迷くお清と番はば方場を早くとの
 産を切とさせんとおふさむさうぞ何とあく不真の体小見
 えさうぞ。後の崇つととありふけり
 嵯峨通假寐卷之十八終

樂亭西馬作

稻妻飛怪鼠標子 出板

一勇齋國芳画 七編

考紅夢 國貞画

種 字体谷峠 今一編後也

壽笑亭笑壽作 五編

與謝武郎戀夜話

一壽齋國貞画 六編

比異 二個 

一勇齋國貞画 五編

文久元年辛酉孟春新刻

錦昇堂 志比もやに

